陸軍歷史

勝
2
11

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

陸軍歴史巻十一

砲臺築造中

目録

一 松平肥前守ノ建白書牘

一 佐賀侯江川氏ニ贈ル書

一 本蔦森太吏佐久間象山ヘ問合ノ書留

一 江川氏ヘ質問ノ箇條

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

一 肥前國神篤四郎篤ノ工事

一 神篤伊王篤砲臺築造ノ褒詞

一 同上工事ノ費額

一 砲臺築造ノ功ヲ賞シ佐賀矦ニ刀ヲ賜フ

一 和蘭船將ニ砲臺ノ位置適否ヲ詢フ

一 魯艦提督ニ砲臺ノ贈問

一 佐賀矦ノ盡力

一 京都所司代近海警備ノ指令

一 紀擢沿岸ノ警備

一 松平隱岐守家來ノ伺

一 松平隱岐守警衛場見廻ノ伺外國奉行ノ評議

一 濱園砲臺築造ノ上申

一 臺場築造工事ノ照會

一 濱園砲臺普請場勤番人ノ上申

一 江戸沿岸警備意見ノ上申

一 鐵砲洲海岸明石町用地ノ伺

一 松平安藝守井羽左京大夫家來ノ内意警衛掛ノ評議

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

陸軍歴史巻十一

砲臺築造中

嘉永三年庚戌二月參府中老中阿部伊勢守ヨリ持參之書付

長崎表臺場備向之儀存寄も有之候ハヽ申上候樣去ル巳年被相達候ニ付時勢之振合考量を

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

加ヘ松平美濃守申合存慮申上候處両家見込
之趣ニ而者人數手配等舊来之姿ニ致倍増一
旦ニ防禦之備十分相整候共注ニ両家之疲弊
を招候樣ニ而ニ永續之處如何ニ有ニ哉然ル
時ハ却而不容易因而先ッ伊王島神嶋等ニ不
及申沙汰湊内ニ長刀岩高鉾を限雖捨置場所
のミ連ニ不目立樣模樣替可被仰付旨被仰
渡候知仕候然ル處彼湊異國船ニ手當向之儀
古来ニ湊内ニ引入外目不乗出通ニ候手配ニ
候得共文化度以来ニ内目不乗入通ニ候手當

海舟書屋

相成古今ニ振合相反候ニ當今防禦之要地ニ
全ク外目之事有之殊ニ異儀を含渡来致候異
船ニ候ハヽ容易内目不乗入候ハヽ於外目虚實
相伺方一ニ法乱妨等相働候節長刀岩高鉾限
リニ而備ニ而ニ何分ニ打拂難行屆且一旦邪正
ニ而ニ乱方相濟高鉾邊ニ而引入被置候而も元來蛮
夷之事故事情取違不意乱妨等ニ及直ニ沖目
走出候事も難計是又長刀岩高鉾を限之ニ而備
ニ而ニ無實ニ無費ニ而湊内ニ而増築可相成而
家見込之場所ニ畢竟外目之ニ而備ニ取繋業合

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

可相施為之見込ニ候庭形ニ而根元之外目ニ備無之様替被仰付候迄ニ而首尾不致一覧候得分ニ備増ニ詮可相立哉と懸念仕候ニ付而ハ兎角船数ニ而防禦之手当実用之ニ専申付候様被承知仕候就而ハ外目ニ備向之儀両家申合猶又申上候ニ付而ハ一往彼ニ而渡候様ニ仕度候ニ付而ハ同様ニ候ハヽ幸伊王島神島ニ而領分之儀ニ候ニ付而ハ其地ニ而一体ニ備向ニ候ハヽ幸伊王島神島共ニ而番方一手之手人数船等致手当置候ハヽ番非番共ニ而番方一手之手配ニ取結候様可仕奉存候尤疲弊不致通ニ而成丈其取計仕候心得ニ候ニ付而ハ其地ニ而一体ニ備向ニ候ハヽ幸伊王島神島ニ而領分之儀ニ候ニ付而ハ其地ニ而一体

欣躍候陳者長崎表備向之儀外国之方相
懸居候ニ付年来置慮之儀此節一手ニ而相
備候通決心福山閣老へ書付差出置候右焉
別紙ハ貴覧候就而者尚年始賀詞ニ差遣候
家来之而へ内意相含粗滑稽意味也帰国之
上早速砲場取立数多之大砲等鋳立候筈而
不相叶一体海岸之備筒を願ふ鉄製之ヲ
存ケシキツトギーテレイ」ニ鋳造講究候滑
共未滑備悉因而先銅製ニ相決候然る処敝
邑元治工共至而未熟ニ而大銃鋳造之儀甚

海舟書屋

無覚束依之近来雇滑稽相談候筈ニ滑共儀
抱職人長谷川刑部儀助工一両人召連当分
敝邑罷越鋳造方一ト通治工共へ筈と致指
南呉候様致度旨所希ニ候処尤敝邑ニ
治工共一通習熟候ハヽ刑部儀ハ速ニ帰山
可申付六七月程滞在之積りニ致度
存候当今貴境ニ而ハ大砲数種之鋳造之
儀中強及相談候儀ニ候惶悚之至ニ候滑共儀
当方ニ備向ハ至而大切之儀ニ候多年思慮を
竭し実用之手当厳粛為ニ取計此節外国之

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

雲一手ニ而相備ヒ道申上早速其手配相整
係ヒ雲肝要ニ鑄造存分行届候通ニ而ヒ
苦心無益甚心配仕ヒ係ニ而産技物ニ而当
方ニ相懸リ不和事柄ニ云且ヒ雅意ニ而ヒ懇
意ニ仕ヒ不顧前後只管及懇請ヒ条而ヒ諒察
被下而ヒ差支も可有之ヒ滞ヒ仕ヒ辛而差繰ヒ
以心而ヒ領承被下度ニ所新而出ヒ於而ヒ許
諾敷色罷越ヒ頃合ヒ儀ヒ追而帰國ニ上尚
又可及而懸合ニ候ニ付此段及而相談置度卒ニ
如此不盡

二月廿二日　齊正

韮山縣令

再啓本文先達而ヒ工イスルニ而而鑄試之上
否而知ら世可被下度趣ニ仰聞而坐度最早
而鑄試可相成而ヒ様子委細承度度氣候不調
随分而保嗇可被成度不一

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

佐賀藩本島藤太夫佐久間象山へ問合書

留

信州松代藩佐久間修理事先年海防之議論等
承及候儀有之當時本庄ニ住居砲術指南門人取
立有之及面會議論等承及候ニ付有益之
儀も可有之と同方相尋面會緩々談話之末今
度由自領海岸ニ新臺場取建築之儀公邉由届
出之末即今ハ其由手配半ニ有之就右江川氏
ニ色々由相談として菲山表嚴越廉々相願置

海舟書屋

候得共未確ニ不及儀相分為甚業痛ニ仕合ニ付
仍卒預示教度頼入及啓申述候雲海防之儀ニ
實ニ方今ニ急務然ルニ砲臺由新築ニ儀思召被
為立候儀國家之為恐悦至極ニ由儀ニ付乍不
及自分心得及丈ケニ儀ニ不殘心底可申談就而
者長崎表ニ圖面ニ而ハ一見致度申聞及ニ付
則持參致シ候港圖備ニ又今度由新築由目論見
之大畧廉書ヲ以相示雲候得ハ舊ヲ熟覽之上
可及返答趣旨ニ野戰銃打放シ規則等も聲古
致シ候ニ付入門之儀申入直ニ聲古場へ罷出

誓古相始其後日々早朝ヨリ出席終日野戦銃ヲ
一ウ井ツスル、モルチール臺場同打放シ規則ノ演習
五月初旬ヨリ大暑致習得ニ就而ハ當表ヨリ儀最
早相仕廻又々薩山ノ方罷越差出置ル處ヨリ
各相伺一刻モ帰國許難ク帰ル方可然相考其段
佐久間ヘ申述ル心得ニ付此通和決ル
同人ヘ差出置ル質問条々

一八十ポントボムカノン

一三十六ポントカノン

一三十ポントカノン

海舟書屋

一二十四ポントカノン

凡海岸ニ砲ヲ備ル敵船ヲ打砕ニヤガテナート
弾ニ至ルヲ利用有ヲ問ズ右四種ノ砲ヲ其
他ノ形勢ヲ應シ備候ハヽ先ッ外海ヲ向ヲ場
廣ノ海岸ヘ成丈大貫目ノ砲ヲ備ヘ内海ヘ方
ハ次第ヨ小貫目ノ砲ヲ備ヘ申ス尤不意ニ事
起リ其節早ク放發出来ル場ニ外海ヘ向ル
雲リモ二十四ポント砲ヲ取交可申内海ヘ方
ヘモ大貫目取交ルヽ内外ヘ配リル大小ヽ
砲何モヨ通取交ノ然ル処ヨ海岸臺場ヨ儀

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

湊ヶ廣狭ヲ考ヘ大砲何門計リ備置ク可キ事ニ付海口
ヲ凡大砲何門計リ備置ク可キ事ニ付海口
河岸或ハ墓場ヨリ海面ヘ遠射左ヶ通信ヶ町
数遠近有之ニ付場所ヲ考ヘ砲場ヶ高サ水面
ヶ何間位築立ノ事然哉
一海面ヘ遠射凡二十四五町ヶ霧
一同凡十七八町ヶ霧
一同凡十四五町ヶ霧
一ダライバス其外小砲用意有ノ何挺計ノ有
之哉

一敵舶不意襲来之節防禦法無而習練ヶ事
一打放ヶ薬玉薬分配致ノ格之事
一雨中放發而降之事
一敵舶ト對ヒ節夜中放發并守備心得之事
一ボムベンガラナート弾之外利用ヶ玉類何ノ用
意ノ事
一大砲ニ用ル導火ハゲスウ井ンド。ペイプ燧石仕
掛ノ内何ヲ可用哉
一大砲用ハトロン之事
一商易適実ヲ有矢倉之事

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

一彈薬庫造法并彈薬圍様之事

一海岸臺場築造法之事

一海岸ヲ備ル利用ある砲架之事

一砲一門ニ付彈薬何發ツヽ用意可然哉

右之外ニも多ク可有之候尚此示教相願候

佐久間答書

一右書之大砲四種之外尚十二ポント銅短砲ハ

備有之候度

一外海ニ向ケ所々伊王島之事ニ有之處此島

海舟書屋

右風波ヲ節援兵被差出為用候

大砲を始備置ケ候ハヽ人數少ク共ある

ク候然又彼島へ多人數被差置候ハヽ軍資

之費耗莫大ニ事ニ存候ニ付ある

ヶ有之ケ所ニ置ケものニ無之候

要ヽ地ヲ以て誠ニ止事を得さる

ヶ所ニ彼島ヽ地勢親しく落て目覩候ハさ

れハ強て難申候得共姑し圖ヲ援て論し候

得ニも止むを得さる場所ニハ無ヽ候ハヽ

深く防國力を盡さゝる地ニ有之候存

候

一固ニ就テ考候ニ白崎ヲ地第一ノ要害ニテ其次ハ神崎其次ハ白崎ノ鳴ト存候白崎ノ地ヲ仮ニ大ナル大砲五六ハッテレイ以上（砲ハ座以テ一ハッテレイト稱ス）被差置候神崎等ハ二ハッテレイ計ノ砲事足リ可申候但大小砲ノ取合ノ事大事ト存候ハ十ポント餘リ多過ヲ為ハ然ルヘシ二十四ポント二十ポント多クハ備ヘ其上敵ヲ自然ト堂場近ク犯シ来ル時ブリッキドースヲ打ケ半為ノ初条ノ如ク十二ポント砲

海舟書屋

一ケ所ニ両三門ハ備置テ然ル

一砲臺ニ砲ヲ居ル高サハ海面ヨリ六間又ハ六間半計ヲ常法ト致ス大砲之外デユッペルパーク、ヒックス等ハ用意有之度尋常ノゲウエール勿論之事

一賊船不意襲来ノ節防禦ノ専要トシテ別ニ無之平素紀律ヲ明審ニシテ士卒ヲ訓練ヲ精熟シ候外有之間敷候

一雨中ヨリ放發大抵ヨリ雨ニテ優ニ砲発シ難キ候ハ格別ヨリ甚雨ニ候ヘハ「ラーテンクレ」ヨリ間火

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

門よ「キュツセンチー」を用ひ「リクテン」等を向取
扱ひ時ハ砲口よりデックルスルを用ひて可申候
一夜中ニ打放ハ午日白書よ海面ニ方位遠近之
度を審よし夜間もおよそ海上ニ火を挙て其遠
近を見知り可申戦よ臨候而ハ敵船より打出
候砲之火光を目當ニ為て測り置候る手心を
以て放候すべき事ニ候
一弾薬之用意ハ毎砲一書夜連続為差支程よ備
候事常法よ候得共三ポント短砲を一ミニユー
ト、三斤を打候申候弾量重き長砲を未タ試

海舟書屋

不申是ハ未タ實驗之上其数ハ定相成可申候大
略よ見ハ申候譯ニて鈴林
一打放之節弾薬ハ配ニ事「エキセル、シチー」の規則
ニ而可然候
一海岸臺場ニハ通常ゲスウ井ンドペイプを用ひ
申候燧石を用ひ候得共夫ハ雷汞又ハ「コロリ
子カリー」ニ便利ニ存候其機の製オーフルスタラ
ーテンニ相見申候
一矢倉をうけ候管法ハ「ゲルレリング、ヲップセット」

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

バウッセ
とも云
の外有之候
一弾薬庫造法并位置ハオーフルスタラーテン、パス
チエール等ニ相見申候
一臺場築法ヲカルテン、ベウセル、オーフルストラーテン、
サバルドの類ヲ参考ニ宜シク候
一海岸砲架ヲ二十四ポント以上「キユストアホイト」の
製可然候十二ポント砲ハ「ヘルドアホイト」を可用
候
以上
一近日パステユールを捨テ雲各門の大砲ヲ弾薬

海舟書屋

を備候尋常之法則出居候間例ニ依備場等ニ
而考合ニ相成候半ニ則抄出掛御目候

守城砲一門
野戦砲一門
二十九拇ナルヘシ
大モルチール
二十拇ナルヘシ
小モルチール
守城十八ポント以上
同十二ポント以下
野戦砲
ホーウ并ツスル

弾薬九百發
弾薬四百發
弾薬五百發
弾薬六百發
ブリツキドース三十發ツヽ
同七十五發ツヽ
同二百發ツヽ
同十五發ツヽ

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

是ハ築城家ニ而申候法則と存候アルヂルレリ
ーの定ハ是ハ其数多き様ニ存候尚御探討
座候様存候
江川氏ニ問合之箇條
一三ヶ所臺場ニ石火矢配付凡左ニ通ニ而ハ可
有之哉
是ハ場所一覧不仕候而ハ甚差支申候先
此儘御閣置拝見仕候得共如何ニも異國ニ対
此場所ニ申候難申上候
海舟書屋

伊王島
八十ポント、ボムカノン
一
六十ポント、ホムカノン
三十六ポント常カノン　取交三十五挺
二十四ポント同
玉薬庫　筒数三十五挺ニ大体大小薬庫二三ヶ所
神島
右同断　取交三十五挺
香焼島裏海岸二ヶ所
右同断　取交三拾挺

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

都合筒数百ニ付手人数

大筒一挺ニ付大筒役十一人二挺ニ付十九人三挺ニ付二十七人四挺ニ付三拾五人五挺ニ付四拾三人六挺ニ付五十一人備之大筒一挺ニ付インパンテリー十二人相加申候

右之外色々役掛り有之卿雲艤譯築城書中附録ニ詳有之候

詳ニ有之候

一玉薬庫建方

卿雲艤譯築城書中附録ニ詳有之候

一玉薬ニ儀石火矢一挺ニ付何發宛ニて備置

海舟書屋

可然哉

別紙認差出候間御参考有御座候

一ボムベンカラナート之外用意すべき玉類之事

リフトコーデルブリッケンドロイフ　マスセコーゲル　ミキートボート焼弾窒等

一玉薬配付敵ニ放火を不蒙要心如何様致す哉

卿雲艤譯築城書附録火薬ニ條詳ニ有之候

一大砲掛之外小筒足軽人数之事

打人数ニ條ニ記申候

一三ヶ所砦場ニ用意早船弐艘計可然哉

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

砲場之形勢又ハ地見計の然ル
一在中守備心得之事
リフトコーゲルを砦の近邊ヨリ打發ス番兵の
組を置此組中ヨリ二三人ヲ出て見廻るな
り但三人の内一人ヲ騎馬
一雨中打放等差支致候ハヽ
御雷管藥填書附録中詳ニ有之
一火藥久敷置候ハヽ
火藥製法書ニ硫黄ヲ分量を少ゝ増久ゝ
置方宜敷由相見申候

海舟書屋

一昼夜ヽ像燈筒を熱体ヨリ用ひドンドル筒ヲ精熟
ス者を撰ひ遊隊ニ用ひいつゝ可有ヽ試ス事
若當ル支ヘル時ハ右ニ可無都合ドンドル筒
ヽ方無利相違無之候
右鹿ヽ外必要ヽ事件相洩ヲ候ハヽ宜敷御指
教被成下度候又砦場雛形且鉄砲御鑄試ヽ
像奉願候事
砦場雛形ヽ像ひ追ヽ出来立ヽ上御屋敷迄
御差出候鉄砲鑄立試ヽ像ひ追ヽ何分急ニ着手
相成兼候尚舊ヽ研究試驗ヽ上否為御知可

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

仕候

口達

四郎島　神島ゟ取續ゟ海中尚又調合仕雲海
底ゟ都而岩石相續干潟ゟ節ハ艘岸ゟ干出
仕岩根五十間餘ニ相及汐上七十間餘ニ而
深サ六間程ゟ雲凡三十間計り其前後艘岸ゟ
方ゟ寄り次第ニ淺目相成り尤滿汐ゟ節ハ此
上深サ八尺程相増仕将又四郎島東脇ニ相益
候小島ゟゟ間三十間程干潟ゟ節ハ海底干揚
り仕程ニ有之此雲埋方致し四郎嶋ゟ取續地

海舟書屋

床出来仕半ゟ内備筒五六挺ハ出来了申相見
仕右ゟ四郎嶋頂上切崩仕岩石を以同所海底
埋方相整仕滑ゟ至極無利ニ而業合お届可申
ニ付而ゟ先ハ同所取續ゟ埋方取掛右仕而四
郎島取續ゟ儀ゟ右小島取續出来ニ随前文
艘岸ゟゟ岩むえニ取續次第ニ埋方相整仕ハ
海口自然ゟ狭く相成追ゟ築留ゟ業合も手軽
可相成と吟味合仕条先ハ前断ゟ手順を以漸
漸築留ゟ手筈被相付仕方ニゟ有ゟ間敷且
神島陣屋下船入ゟ波戸場無ゟ而ゟ風波ゟ節

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

船繋出来為差支候ニ付普又急ニ築方相成候様被仰付候方ニ有之候間其段旁致申達候以上

亥三月

右ゝ未四月三日應ゝ相達ニ候通ニ被仰付候将又備前石工共ゝ儀去ル不及申雇入被差遣候事

亥十二月廿二日

右ゝ通申書付被相渡候

長崎表神島伊王嶋臺場築立ゝ儀莫大ゝ費用ニ而ハ御国力遂ニ及成功ニ候段格別ゝ儀ニ候

一国ニ長崎御固之儀大業成就致ニ付御ゝ相関候ニ付出格ゝ御沙汰ヲ以先達而馬喰町ニ而貸付并長崎ニ而貸渡相成候金五万両返納ニ而ハ御勘定奉行長崎奉行ニ而被談候右ニ付而ゝ長崎表ニ而備向ゝ儀弥ゝ精被申付永世迄御安心被遊候様ニ被心得候

去ル成年暮ゟ當今迄ニ増築方ニ而遣料

一正銀七百四拾三貫九百貳拾九匁

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

金二〆壹万四百四拾五両餘

右ハ神島之内崎雲ゟ四郎島ゟ間海中埋方儀
又小島取續墓場地床道筋置立等

一陣屋　貳軒
一道具藏壹軒
伊王島之内西岬ニ墓場其外地床切開道筋切
通等

一陣屋　貳軒
一道具藏三軒
一小番屋三軒

惣合金壹万五千八百四拾四両餘

子四月

安政元年甲寅十一月

御刀備前國長光
代金三百枚

松平肥前守

右ハ長崎港神島伊王島ゟ新ニ墓場築立ゟ
儀格別ゟ大業ゟ而費用莫大ゟ趣相聞候
處積年致丹誠及成功築立ル際立宜發長崎
表永世ゟ御備相立候段達　御聽ニ滿悦ゟ
依事ニ付御傳来ゟ而刀被

海州書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

下之

安政五年午十一月長崎奉行所ヨリ差出ス書付

自領神島墓場ヲ儀新規取立可相整置旨ニ
付傳習方蘭人共ヲ一見為致尚配ヲ滞失等為
相尋度旨庭前傳習所用透ヲ以右ヲ者共同
所ヘ罷越可被仕度然ル節ヲ趣ニ寄リ砲發ヲ
モ相整可被仕度此段御屆奉願ヨリ被申付候以上

松平肥前守御役

十一月

久米次右衛門

付札

海舟書屋

書面之趣承屆候

十二月二日蘭人共神島墓場拜見罷越候ニ
付早朝ヨリ同嶋海相待候處朝五半時比船將
傳又第一等二等士官公用方都合四人公儀傳
習方左ヲ人ヲ勝氏ニ右船運用ニ付參り無
之候

白井勇三郎

尾本久作

河野榮次郎

調役下役

高橋三郎

澤鎭太郎

設樂篤尓

此小人目付

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

検使　横山敬一　三浦龍次郎

一四ツ時前波戸ヶ揚陸表坂通り金比羅下切通シ
ヶ堂支山菅谷弾薬庫等ヲ見ル日本蔵作ニシ
テ土夛相増置候段申述候處此處ハ海面ヨリ
遠ク隔場所ニ付随分其通ニシテ差支無之由
申候一体四郎島墓場築造之頃迄ハ墓場築法
之書籍ニ乏敷其調合不行屈胸壁ヲ外弾薬庫
ヲ設筒配等甚ダ都合ヲ悪ニ有之候ヲ傳習ヲ
上追々改築等相整候而相叶間敷其心得ヲ
以一見ヲ上存寄無伏臓示教ニ預リ度申述候

海舟書屋

電垂細承知ニ由相答候等雲築留迄小島四郎
島山上ヘ案内電ヲ見廻候上山上百五十ポント
砲二挺小島八十ポント砲一挺カンタイ篤目的十三
町六反三蒭致候電百五十ポント二弾鳴ヲ頂上射
ケヅリ蒭ヲ八十ポントト一弾島之中央ニ著蒭ス
一胸壁ニ砲門ヲ有無相尋候電一体海岸墓場ハ
砲門不設ヲ通法トス然レ共場所ニヨリ設ケ
候事モ有之當墓場ノ如キハ砲門ヲ設方可然
存候由申候胸壁内部ヲ高サハ墓架ヲ前端ト
等シクスルヲ法トス當墓場之内胸壁之内部

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

架車ニ上端ヲ低キ雲多シ不可然一ニ如法
土ヲ置高メ可申候
一築留上八ケ所砲門ヲ開野戦銃備ニ場所砲門
其儘ニシテ胸壁ニ穿令二尺程穿ク致シ砲上
ボムフレーヲ設クヘシ其土穿一ヨルヲ減スヘ
シ
一箇所ニ砲ニ配置随分適當ニ見受候併毎砲ニ
屋作リ有之ハ甚不可然敵丸此屋ニ中リ大害
ヲ受ケ憂アリ皆以取除ケ様左ヲ而營場内弾
薬庫兵士屯等通常ニ屋作リ之是又危シ成丈

海舟書屋

ケ地下ヲ低ク堀下ケ屋上ボムフレーヲ設クヘ
シ左ヲ而廂端胸壁ヲ高ク低キ様ニ致スヘシ
然ル時者敵ノ弾丸胸壁ヲ越テ飛来ルモノホ
ムフレーニ而防ク事ヲ得ル也
一石庫土石穿随分堅實也但天井ノ雲方形ナル
ハ悪シ六十尺以上ノボム丸落チ掛リル時
天井ヲ石折ル落ル事アリ圓天井ヨ致シ候得
者其憂ナシ今ヨリ薬庫ヲ造ラハ圓天井ヨ造
ルヘシ弾薬ヲ備ハ毎砲何程用意ヲ可尋候ニ
付百五十ノ一門ニ二百發ツヽ其餘ハ皆以四百

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

蒸ツ、用意抔段答抔滑者随分宜由申抔當表
臺場如形、大砲数門且彈薬ゟ随分多量之時備
有之ニ付英人共ニ一見為致抔而ゟ悪敷ハ申
間敷と申抔相答抔而者只今英人共ヘ為見申抔
而者十分ゟ者見受申間敷尚滑ゟ傳習之上ボ
ムフレー等之設其外十分嚴重相成抔上ニ而
一見為致可申心滑抔段相答抔滑者至極尤之
段申候

一當臺場調練等有之抔哉尋抔ニ付春秋両度ヲ
以調練致ー抔月ニ両度ツヽ薬込無之只ペイ

海舟書屋

ブ管のみ相用調練相整平日ゟ大小銃ゟ
稽古致ー抔今ハ初テ参り有之抔故三發放
發一覧ニ入候ゟ不熟ゟ段申述抔處随分規
律正敷放發ゟ見事出来感心ゟ段申抔

一砲ゟ薬量何れゟ通相定居抔哉相尋抔ニボム
カノンゟヘキザンスゟ定ニ擾り其他ゟ砲ゟ力
ルテン、オーフルスタテーテン等ゟ宮ゟ擾ケ段相
答抔

一鉄製砲ゟ何方ゟ而出来抔哉尋抔ニ付國許ゟ
而製造抔由申抔滑ゟ少ゟ拳手ニ見受抔由申

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

候ニ付國製ニ傚ヒ未鑄法善良ニ至ラヌヲ故為
用心藥持ノ部少ニ摹ヲ増鑄造及越申候得ヲ
尤ニ存候試放ヲ仰ノ水ヲ通致ヲ熟尋候ニ付當
春ノ船將ヘ申聞置候通リ実丸半量ノ藥ニ二
丸ヲ用ニ發ニ堪候ものヲ採用ヲ由答ヲ電其
通ニ而安心ヲ發申候
一伊王島ノ内臺場所取立相始居及越候段及ヲ
發申候ニ付同嶋ノ儀ハ矢張當島ヲ振合ニ而
四ヶ所ニ筒備有之候發答ヲ電伊王嶋ノ儀ヲ
餘リ沖手ニ相成候場所ニ而右様筒備無之而

海舟書屋

ハ可然存候同島ノ内備筒願ノ内手ヘ内備
替相成候方可然存候發申候ニ付然ラハ神島
ヘ今少シノ潤色致シ且瓊崎東海岸ヘ石塔様
築立筒備致シ候而ハ如何ノ有之哉尋ヲ電不
及夫高鉾島則天然ノ石塔也此島ヲ半程迄切
崩シ中ヲ窪クシテ周圍ニ砲門ヲ設ケ相備候
ハヽ則石塔同然ノ功用ノ有ヲ申候
一薩ノ尾長刀岩白峯神崎女神等何レモ肝要ノ
地ニ有之地勢ニ應シ岩石開立法則ニ據リ砲臺
築造候筒備相成候ヘハ大体ノ軍艦襲来トモ

随分防禦出来の申と申せ尚又何れも二段三段相備有様可致哉尋ねらるゝ矢張一段ニ備へ可然申候右之外段〻内手〻儀も相尋ね心得ニ而雲前文之問答ニ而錄程時刻押移り午時過相成り候れも宜腹可有ニ付先ツ夫迄ニて相止未相尋度儀も有之ニ付追而傳習方を以書取等ニ而相尋候ハヽ可得貴意候ニ付追而傳習方を以書取等ニ而相尋候ハヽ可得貴意候

海舟書屋

遠方大儀をの上併行れも無故障来臨有之大変存候其上尚備一見ニ上懇ニ示教ニ預り別而忝次第帰郷ニ上主家へ申立候半ニ大悦可有之申述候雲船将始其外一同逸而相願候間葉場拝見本望ニ仕合難有候ニ付礼申上候申候

正月廿九日（文久元年）魯提督應接大略

佐賀藩

本島藤太夫

一白峯ニ地ハ新砲臺建築相成候而随分適當之

場所ト見積候但左右之翼ハ海面不見候ニ付
備砲不及ら存候
附紙朱書
此廉現地再見候處海中ニ凡百間程築出候
得ハ左右ニも十分見通シ矢張此岡備可然
相見へ候
附紙朱書
魯提督存寄申述候ハ意味田中廉太郎書述
百間程築出候ニも莫大ノ費用掛リ且風波
ノ模様ニ寄候而ハ成功数年ヲ掛リ候申儀
ニ有之候左右ヲ打射候ノミニ只左右ヲ打射候ノミニ
折角築出相成候而も場所ヲ外ス時ハ可有之
存候

一後部ノ「カット」ハツテレイ」今少シ後ノ方へ引取
備砲高ク致シ候方可然存候
附紙朱
此「カット」ハツテレイ」之砲下ヨリ當候砲上ボムフ
レイ之設無ラ方可然哉
「カット」ヲ不設海岸へ一般ニ備候砲門設ケ
候様申ス付海岸ラ砲墓ヲ一体砲門ヲ不
設ヲ通則トスル由ニ候得ハ及右ヲ場所ト寄
候而ラ事ニ候得之哉尋候ニ付矢張ヲ通リ
ニ而砲ヲ高ク備候ニ砲門無之方宜敷

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

若得共當地ニ如キ「リコセットバッテレイ」ニ
付砲門不設時ハ砲丸ニ中リ危害ヲ受ル由
申候ニ付然ラハ砲上ボムフレイヲ設ケ而
ハ如何哉ト申ハ夫ニモ不及由申候

一二 海面ヨリ堡塞ヲ仰ク為設ケ我哉ト付ケ居ル砲士
ヨリ屯且弾薬庫弾丸製作所其他武器庫兵粮置
所等ヲ為ニ設ケ由尤滞ヲ兵士ヨリ屯所ハ此
處ニ堡塞ヲ設ケ而モ別ニ相應ヲ地ニ陣所取
立可然火薬庫ハ砲臺ヨリ左右少シ退ケ而小高
キ地ヘ堀入レ敵丸ヲ危害ヲ請様ボムフレイ

一三 堡塞ハ後ノ山上ニ取立ケ方可然敵兵後ヘ廻
リ山上ニ登リ侵襲致ス事有之ケ故用心ヲ備
ヘ度ヲ而不和叶但山上ニ備ケ砲ヲ二十四ポン
ト以下相當相備ケ然ケ
（附紙ニ）此處山上ヘ堡塞築ケ居ヲ嶮岨ヲ山路凡四
町餘ヲ處風雨ヲ節墓場ヘヲ注来ル弁利
ヲ有之相見ケ付近鄰ヘ陣屋取建兵粮藏
武器庫ヲ此處ヘ相建ケ事ヲ弁利ヲ然ル
又山上ヲ成丈ケ岩切崩海中築出ヲ方ヘ埋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

方致し左升而熱体ら地開き十分相整升上
ニ而薬庫其外掫手番兵置所ハ見極升而ら
何分ら有之哉
魯人存寄ら意味田中廉太郎認
此附紙ら通ニ而宜敷可有ら升候升山上ら
防場へ上りハ上陸ら防きら弁利宜敷
容易敵ニ不被乗取場所能ら研究升而陣
屋ハ取立ハ成升方ら存候
一砲臺へ砲を備ふる水面上ら高さ相叶升ら
海面ら凡四間半計りら地を指一此位ら高
さ相當なるへしと云
此廣勝氏ハ取調之砲臺築造提要中ニら十
一エルダ十二エルら有ら
前同断廣太郎認
場所ニより升事ニ而差極難申升ら共凡水
面上三十フート計ハ然存候
一五千本松ら地ら大砲備ニ不及小キ砲ハら相備
ハ然候
附紙朱
此廣ハ四ハ廿二ハ取文凡四挺程ハ相備ハ
然哉

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

右同断鷹左郎認

此霧沖手且内同ニ向け北ノ方へ相備候方

可然候

一六 塩屋海岸を船上ゟ遠見いたして此邊砲を備可然

見受候

附紙朱 山鷹尚御考量之事

右同断鷹左郎認

千本松へ備相成候ゟ霧備ニ而ハ及候

別紙墨書朱書壹印之壹味御問合之霧提督存

寄墨書之通ニ候事

同二印「カットバッテレー」之霧ハ過日於現地存寄申

述候ニ付假ニ草図取立相示候霧今又墨書申聞

候事

同三印朱書之意味を以御問合之霧右同断

同四印右同断

同五印右同断

同六印右同断

右之外相尋候鷹ニ

一砲臺取立之図中央之霧窪く引込ニ而ハ不利

込ニて平直ニ設けたる方利害相最候霧図面

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

中窪く相成り居れ趣意触不心得事に付当
左右ら〳〵矢利砲門を開き都合宜き為く候ら
存れ譯ゝ矢利專一ゝ砲門ゝ外部を鉄り廣く
開く時ハ胸壁多薄く成り敵丸ゝ防き弱く相
成候故中央ゝ處を窪く致し付候ゝ砲
ゝ向ふ為ゝ設ケて唯一段ゝ砲を備れ
「カットバッテレー」不設候ゝ付ゝ處ゝ
ゝ向ふ為ゝ設ケ處提督ゝ礼初ゝ定通り
一砲臺後面ゝ設ハ矢張図面ゝ通胸壁築廻候筈
ゝ而ハ然ゝ存れ由相答候
一砲臺後面ゝ設ハ矢張図面ゝ通胸壁築廻候筈
ゝ而ハ然ゝ存れ由相答候
而不叶儀ゝ有ゝ哉是ハ處自分考ゝ而後面ハ
山手ゝ申此方ゝ兵士屯候故胸壁ゝ設ゝ不
及候ゝ存候
一砲臺ゝ砲を備る為隔砲孔ゝ中心ゝ中心迄七
エルゝ而綱ゝ有ゝ其通可然哉處ハ夫ゝ篠
り近く有ゝ今少し遠く隔り候方可然申候ゝ
付然らハ何程位隔り候適當ゝ哉處ハ滑
ゝ右等ゝ細事被問合候事甚面倒ゝ為様ゝ風
情ゝ而何ゝ申候得ゝ而ハ何れ
砲臺築法ゝ書籍ゝ奉行所迄ゝ差出候間右を

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

以研究以来致精
一白崎より以北之海岸魚見嶽女神神崎等之砲臺
何れを要地と致候哉最初雲女神ハ唯前通り
を射候のみにて不十分神崎ハ何方へも放射
出来随分要地ニ存候薩尾如何と最初御尋同
所之四郎島ニ備有之候哉無之候ても無差支
存候由伊王島ハ筒備之可否相尋候雲岡為ハ
遠方相離居殊ニ茅葉其外欠乏之節時ニより急ニ
運送難河ニ合時ハ甚困難之儀ニ付有之不都
利之場所ニ有之右之内名島ハ成兵何百人有之候哉

海舟書屋

其人數ハ白崎小ヶ倉邊ニ移し守らせ候方可
然存候由申候ニ付然らハ伊王島之筒備ハ取
止之方可然哉尋候得ハ不取答候得
共取止ニも可然旨口氣ニ申聞候
一魯國蒸明鏡之口径相尋候雲此像ハ何分難申
聞候譯ニ其職之者了見ニ而自新工夫を加へ
種々改正を加候事ニ而自分出船後も和変
居候哉も難計存候ニ付差極而答出来無由
申聞答候不分明候得共彼是之問答候筆ニ移
り時刻相費向方迷惑之模様ニ付折返

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

し再問無号安ら夫迄ニ而相止左れ而右裁明
銃二三挺持渡ル模様探索ニ候約束被下候事
右之始末旬卒ニ而委曲ニ而答ニ行届首
尾不結ニ候而已ニ有之ニ旦慮該遺漏ニ可有候
哉ニ付而ハ心覚ニ大略相認申候
一白崎砲臺ニ而建築ニ候事先年勝麟太郎模ニ精
力を被盡委細ニ取調ニ候書有之ニ候間生
枝ニ右ニ書立ニ模文字ニ而寫替提督ニ拜
見被仰付尚存寄ニ次第ニ而ハ問合ニ庭ニ而ニ何
分不有ニ候哉

海舟書屋

一砲臺ニ新築ニ付魯人存寄ニ候間ニ
在ニ候臺場ニ備ニ大砲ニ臺ニ製式現地器
越一見不仕ニ而ハ存寄難申上候申立併公儀
ニ臺場ニ引入ニ候ニ次第有之ニ
像難被ニ取計就而ニ候間ニ強現物ニ
無ニ而ニ而ハ繪圖面ニ尺度ニ相記ニ候ニ相分
像ニ付而ニ趣ニ寄繪圖面ニ以被相示存寄申
出ニ候様ニ申渡ニ候ニ而ハ何分ニ有ニ候哉
一白崎小ヶ倉ニ儀現地ニ一見相濟ニ上ニ砲臺築
造ニ規則砲ニ玉目砲數ニ一切ニ事件委細書

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

面ヲ以相示ス様提督ヨリ被仰達ヲ以下度奉願候

右應接シ手續書三田中廣太郎迄内々差遣置

抑佐賀侯ノ長崎警備ニ力ヲ盡サレシハ至レリト謂フヘシ彼有名ナル四郎島増築ノ如キハ其臣田代孫三郎ニ命シコレヲ擔當セシメ全ク侯ノ一手ヲ以テ海中埋立大砲据付ニ至ル迄巨費ヲ厭ハス種々ノ困難ヲ経テ成功ニ至ルモ猶其欠漏アランヲ慮リ

始ニコレヲ江川太郎左衛門及ヒ佐久間象山等ニ諮詢シ又和蘭船將及魯艦ノ提督ニモ質議セラルヽ等注意ノ周到國家ノ為ニ精力ヲ竭サルヽノ一端ヲ見ル可シ又砲銃鑄造ノ事ハ杉谷雍介ヲ擧テ之ニ任ス始メ雍介江戸游學中西洋ノ書ニ就テ鑄砲ノ事ヲ研究シ鑄冶ヲ試ルニ等ハ田中虎六郎橋本新左衛門谷口彌右衛門等ト謀リ反射爐ヲ築キ不鉸土類ノ穿鑿鐵質ノ分析鑄砲ノ試驗同心協力百折不撓ノ精神ヲ以テ日夜勉

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

勵シ歳月ヲ経テ竣工ニ及フト云ヘ共砲技一切ノ事ハ初ヨリ之ヲ本島藤太夫ニ任シ海軍ノ事ハ專ラ佐野榮壽左衛門ニ委スル等撰任皆其人ヲ得タルハ極テ藻鑒ノ明アリサレハ功業ノ赫然世ニ著ルルキモ亦宜ヘナリ

安政元年甲寅十一月所司代ヨリ達

近来異國船渡来ニ付而警衛向ヲ厳重ニ被仰出候ニ付テハ御固青表御守護ノ儀先達而伊勢深ク御心配被為在今度猶又御警衛向ヲ厳重ニ被仰付候ニ付テハ御守衛向別ニ御世話被遊當地七口ノ御固青山下酒井修理大夫松平時之助ヨリ被仰付候事ニ去ル辰浮共方今ノ時勢ニ寄夫ニ及ハ固ヨリ御世話モ有ヲ多隠岐守永井遠江守ヨリ被仰付候右ノ外時宜ニ寄援兵ヲ繰出シ陸路御固等之儀其節ニ模様

ら得と申達置候警衛向等も夫と摩く行届候様
可取計候

一松平伯耆守牧野豊前守領分近海ら異國船渡
来万一不容易形勢ニ至り候節ハ自然京都
つも相聞へ候様ニ付申談自領他領ら無差別
相互ニ援兵ニも差出防禦厳重行届候様急
而手筈申合可置且京極備中守儀も右両人
ら急而手筈申合置時宜ニ寄行れ成共援兵差
出警衛向等ニ行届候様可致候

一紀伊殿領分紀州加田浦辺ハ松平阿波守領分淡
路島由良港ハ要所ニ付同所最寄要害ら場所
ら台場等新築防禦筋手厚ニ申談置候様可致候
尚出張の節ハ其地領主ニ世話ら有之候様被
仰出候旨ハ兼而申来候間得其意右ら趣ハ
門番ニ其外地役人ら面ニ為心得可被相
達候

同年十二月

紀伊殿家老ら

紀伊殿領分紀州加田浦辺ハ大坂湊ら要所
ニ付急ニ被仰出候ハ有之候通右最寄要害ら場
所ら台場等新築防禦筋ら儀今一際心手厚

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

松平阿波守

松平兵部大輔

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

路左衛門尉岩瀬修理大久保右近将監立田岩
太郎村垣與三郎ヲ以承合申候処又々被申渡候
尤右臺場預リ之面々ヨリ之届ケ無之内ハ勿論
傭可有之ニ付間了候得共其意ヲ以上

七月十八日

土屋采女正殿　老中連名

安治川南目印山下右臺場壹ヶ所

据付

大砲六貫目臺場筒　二挺

二十挺ランゲホーイッスル
五貫目野戦筒　八挺

海舟書屋

十五挺同断貳貫五百目　八挺

十二斤カノン壹貫貳百五拾目　六挺

同所北附洲右臺場壹ヶ所

据付

大砲同断

木津川南右波戸場上右臺場壹ヶ所

据付

大砲六貫目五貫目二貫目壹貫貳百五
十目　都合貳拾挺

同所北附洲右臺場壹ヶ所

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

据付

大砲安治川同断

御備舩二十艘

右ハ西洋製ニ倣ひ製造被　仰付候尤右之内一艘ハ當地ニ而打立据付大砲幷附属品道具共一同ニ相渡旨ニ候処九艘ハ右舩形ニ通於其地製造致シ附属品道具出来次第西ノ方ニ而相渡追々出来ニ付備舩出来次第西ノ方ニ而相渡候追々出来ニ付御備場預リ之向ニハ壹艘相渡候ニ而ハ川口御臺場預リ之向ニハ壹艘堺浦御固ニ向ニハ三艘御渡ニ相成候間西ノ方ニ而相渡候旨ニ付天保度ニ据合ニ候川ニ而ハ御固ニ向ニハ五艘灘目ニ而ハ西宮迄御固ニ向ニハ壹艘堺浦御固ニ向ニハ三艘御渡ニ相成候間西ノ方ニ而相渡候旨ニ付天保度ニ据合ニ候川ニ而ハ御固ニ向ニハ五艘灘目ニ而ハ西宮迄御固ニ向ニハ壹艘堺浦御固ニ向ニハ三艘御渡ニ相成候間西ノ方ニ而相渡候旨ニ付

別紙

其地両川口ニ御臺場御築立被　仰出候右最寄ニ候ハヽ土砂引足為ニ候ハヽ趣ニ付天保度ニ据合ニ候川ニ而ハ御固ニ向ニハ五艘灘目ニ而ハ西宮迄御固ニ向ニハ壹艘堺浦御固ニ向ニハ三艘御渡ニ相成候間西ノ方ニ而相渡候旨ニ付

其地両川口ニ御臺場御築立被　仰出候右最寄ニ候ハヽ土砂引足為ニ候ハヽ趣ニ付天保度ニ据合ニ候川ニ而ハ御固ニ向ニハ五艘灘目ニ而ハ西宮迄御固ニ向ニハ壹艘堺浦御固ニ向ニハ三艘御渡ニ相成候間西ノ方ニ而相渡候旨ニ付

其地両川口ニ御臺場御築立被　仰出候右最寄ニ候ハヽ土砂引足為ニ候ハヽ趣ニ付天保度ニ据合ニ候川ニ而ハ御固ニ向ニハ五艘灘目ニ而ハ西宮迄御固ニ向ニハ壹艘堺浦御固ニ向ニハ三艘御渡ニ相成候間西ノ方ニ而相渡候旨ニ付

其地両川口ニ御臺場御築立被　仰出候右最寄ニ候ハヽ土砂引足為ニ候ハヽ趣ニ付天保度ニ据合ニ候川ニ而ハ御固ニ向ニハ五艘灘目ニ而ハ西宮迄御固ニ向ニハ壹艘堺浦御固ニ向ニハ三艘御渡ニ相成候間西ノ方ニ而相渡候旨ニ付

其地両川口ニ御臺場御築立被　仰出候右最寄ニ候ハヽ土砂引足為ニ候ハヽ趣ニ付天保度ニ据合ニ候川ニ而ハ御固ニ向ニハ五艘灘目ニ而ハ西宮迄御固ニ向ニハ壹艘堺浦御固ニ向ニハ三艘御渡ニ相成候間西ノ方ニ而相渡候旨ニ付

其地両川口ニ御臺場御築立被　仰出候右最寄ニ候ハヽ土砂引足為ニ候ハヽ趣ニ付天保度ニ据合ニ候川ニ而ハ御固ニ向ニハ五艘灘目ニ而ハ西宮迄御固ニ向ニハ壹艘堺浦御固ニ向ニハ三艘御渡ニ相成候間西ノ方ニ而相渡候旨ニ付

其地両川口ニ御臺場御築立被　仰出候右最寄ニ候ハヽ土砂引足為ニ候ハヽ趣ニ付天保度ニ据合ニ候川ニ而ハ御固ニ向ニハ五艘灘目ニ而ハ西宮迄御固ニ向ニハ壹艘堺浦御固ニ向ニハ三艘御渡ニ相成候間西ノ方ニ而相渡候旨ニ付

其地両川口ニ御臺場御築立被　仰出候右最寄ニ候ハヽ土砂引足為ニ候ハヽ趣ニ付天保度ニ据合ニ候川ニ而ハ御固ニ向ニハ五艘灘目ニ而ハ西宮迄御固ニ向ニハ壹艘堺浦御固ニ向ニハ三艘御渡ニ相成候間西ノ方ニ而相渡候旨ニ付

其地両川口ニ御臺場御築立被　仰出候右最寄ニ候ハヽ土砂引足為ニ候ハヽ趣ニ付天保度ニ据合ニ候川ニ而ハ御固ニ向ニハ五艘灘目ニ而ハ西宮迄御固ニ向ニハ壹艘堺浦御固ニ向ニハ三艘御渡ニ相成候間西ノ方ニ而相渡候旨ニ付

其地両川口ニ御臺場御築立被　仰出候右最寄ニ候ハヽ土砂引足為ニ候ハヽ趣ニ付天保度ニ据合ニ候川ニ而ハ御固ニ向ニハ五艘灘目ニ而ハ西宮迄御固ニ向ニハ壹艘堺浦御固ニ向ニハ三艘御渡ニ相成候間西ノ方ニ而相渡候旨ニ付

其地両川口ニ御臺場御築立被　仰出候右最寄ニ候ハヽ土砂引足為ニ候ハヽ趣ニ付天保度ニ据合ニ候川ニ而ハ御固ニ向ニハ五艘灘目ニ而ハ西宮迄御固ニ向ニハ壹艘堺浦御固ニ向ニハ三艘御渡ニ相成候間西ノ方ニ而相渡候旨ニ付

其地両川口ニ御臺場御築立被　仰出候右最寄ニ候ハヽ土砂引足為ニ候ハヽ趣ニ付天保度ニ据合ニ候川ニ而ハ御固ニ向ニハ五艘灘目ニ而ハ西宮迄御固ニ向ニハ壹艘堺浦御固ニ向ニハ三艘御渡ニ相成候間西ノ方ニ而相渡候旨ニ付

其地両川口ニ御臺場御築立被　仰出候右最寄ニ候ハヽ土砂引足為ニ候ハヽ趣ニ付天保度ニ据合ニ候川ニ而ハ御固ニ向ニハ五艘灘目ニ而ハ西宮迄御固ニ向ニハ壹艘堺浦御固ニ向ニハ三艘御渡ニ相成候間西ノ方ニ而相渡候旨ニ付

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

用達差湊不容易候出方ニも候得共御警衛
向ニ係り候而ハ波差置兼候ニ付御手当
候人用ニ而ハ候得共御普請等ニ候ハヽ備船ニ而
ハ却而達弁通被　仰出候事ニ候間了被得其
意候而ハ品川口ニ水行不宜湊筋浅く相成運送
不便利ニ付自然諸物価ニ差響キ市中一体
之衰微ニ基ニ候ニ相依而ハ御手当ニ御行
届ニ候ニ付而ハ而已ならず相成百姓共
ニ臨時大変不被　仰付而ハ相成候ニ付
右ニ付而ハ場新築ニ候ハヽ追而川口ニ而ハ被
仰出候節水行等障ニ不相成様ニ御手当
ニ而ハ御勤無之候而ハ墓

海舟書屋

場ニ候ニ付而ハ窓備第一ニ築立候様町奉行ニ
而ハ申渡候様存候

武州神奈川宿ニ内字権師町海面ニ墓場築立候ニ付同
所礫付ニ而ハ墓場迄ハ先達神奈川ニ而奉行所ニ而上築
立中道ニ而ハ助附置兵礫付ニ而ハ矢来ニ而ハ葬送ニ而ハ
出来候ニ付而ハ当士往来ニ而ハ非常ニ便利
ニ候ニ相成候間別紙絵図面ニ朱引ニ而ハ道ニ而ハ助ニ而ハ
候ニ付而ハ先右ニ而ハ助ニ而ハ橋渡候様ニ而ハ御取

方芒為取り橋掛汐入ニ海中右道筋磯付ハ以来為取締
朱引ニ通柵仕付申度奉存候地所内引渡被下度左
様ニ無之場合ニ而ハ平生ハ手船差置并漁船を始
風波其外共差支為相繋申度此段奉伺候内
慮奉伺候以上

三月廿五日

松平隠岐守家来
安東牧蔵

奉書取

書面之通相心得可申旨承知奉
畏候以上

三月廿五日

松平隠岐守家来
安東牧蔵

武州神奈川宿之内字猿俣町海面埋場築立仕候処
成就ニ付申稟之通埋立出来仕候ニ付先達而
伺之上築立并同宿之内字並木町砲臺取拂地所共
上申度此段奉伺候以上

三月廿五日

松平隠岐守家来
安東牧蔵

伺之通並木町地所差上候而ハ猿俣町

建物ニ儀共其侭差置候様心得委細ニ儀ハ
神奈川奉行水谷勝ニ可仕事

右ニ通安藤對馬守様ニ奉伺之処昨夕口書取ヲ以
彼仰渡ニ付地所差上可申旨神奈川宿ニ而字並
木町関門近所ニ人数差出ス様取扱申達候ニ付右
申聞相渕ス上差上申度奉存ス此段申上ス以上

四月二日

松平隠岐守家来

安東牧蔵

海舟書屋

書面松平隠岐守神奈川ニ而教言清場所
又ハ之儀ニ付通ハ達日限ハ委細之儀ハ
私共ニ而談ス様取扱ス通ハ外国人ハ出会ス
取扱方心得ニ儀ハ私共ニ而申談ス様取扱
心得方被仰渡承知ス
六月廿二日
神奈川奉行

松平隠岐守神奈川ニ而教言清場所ニ而取扱
相伺ス趣評議仕申上ス書付

松平隠岐守當月中差支之節ハ神奈川通
ニ而警清場ニ而取扱ニ所陣屋ニ二三日逗留仕宇猟師
町海面ニ新規築立ス建場危出来候ニ付萬ト
見分仕候又ハ教言清向厳重申付置度旨等ニ付相
伺ス書面被成下一覧評議仕ス候ニ付通ハ

不相當之儀も之ある共且失違松平越前守儀も市中警備
持場巡見之儀伺之通被仰渡候儀も申出る寺社
市中届書成可差出旨同所表ニ儀差外国人とも日々歩行
等ハ勿論ニ有隠岐守通行之節自然出逢候ハ儀も可
有之候共御国難人同様ニ心得を以取扱可申候旨被仰渡候儀
禮節ニ異り候故ハ何様ニ取扱ニ手違出来可申も難計候
万一右等之儀ニ付心得居可申旨日限等ニ儀差
以私共ニ通達候ニ付請書面差出候ニ付此段申上候以上
と奉存候ニ付下ニ書面差出候ニ付此段申上候以上

申六月

溝口讃岐守

酒井隠岐守

堀織部正

竹本隼人正

松平石見守

鳥居越前守

覚

松平隠岐守神奈川市中警備場所見廻り儀伺之通
和達日限等無御座候ニ付何れも入津之節松平和達等
得失之意外国人ニ出合候節取扱方心得等ニ
儀差伺候ニ付申渡候ハ可被心得事

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

（神奈川奉行
　松前伊豆守
　大目付
　目付）　早々評議　對馬寺

當月中美文を以申入候通、武州神奈川迫ニ而取建候
所御陣屋ニ而三日程逗留、猟師町海面ニ而軍艦
臺場為築立候ニ付、厳重ニ御警衛御申付度存候
　六月三日　松平隠岐守

私儀當月中美文を以申入候通、武州神奈川迫ニ而取建候
所御陣屋ニ而三日程逗留、猟師町海面ニ軍艦
臺場為築立候ニ付、厳重ニ御警衛御申付度存候
　六月三日

海舟書屋

（朱）附札

可為伺之通、尤も浪士之儀ニ付、神奈川奉行江可被談候

濱御庭ニ而臺場取建之儀ニ付申上候書

付

海岸御警衛掛

寺社奉行

大目付

町奉行

浦勘定奉行

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

海岸地備向之儀安芸向候條ニ付仕越為取掛
候段申上候ヶ所之内濱地庭東南之隅南之方
三拾五間東之方三拾間之砲臺地所等地取建
之積右間数四面ニ内在来小山引平均地泉水
入隅埋立樹木等為伐取申候右地普請明日ゟ
仕越為取掛申候右之場所柄ニ付此段

窪田源太夫
佐目付
林伊太郎
佐勘定吟味役

申上候以上

小納戸頭取濱掛佐目付濱佐殿奉行
ゟ被仰渡下候下候條ニ付此段申上候以上

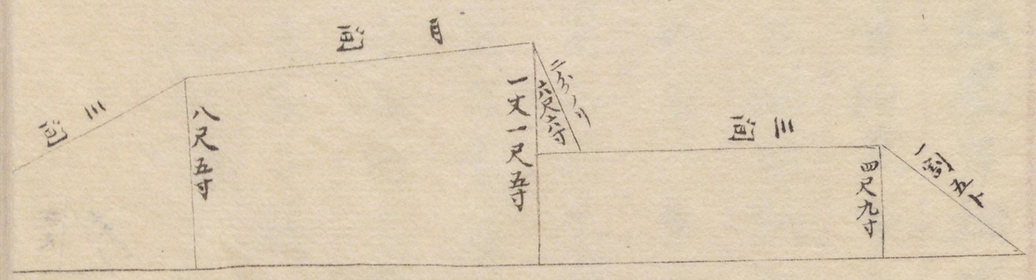
亥五月十日（文久三年）

牧野越中守
松平對馬守
酒井但馬守
井上信濃守
阿部越前守
竹内下野守
都筑駿河守
窪田源太夫

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

濱御庭護胸壁
出来形



鋪物長一間六分六厘

覽

書面之通可被取計旨
大井筆濃守
池田修理
杉浦正一郎
土屋民部
林伊太郎
鈴木大之進
黒坂丹助
御用掛

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

濱内庭内ヶ所取建了相成候墓并四番内墓場
内模様替之儀實地見分之上夫ゝ取調改震護
胸壁其外割合巨細取調小野友五郎望月大象
より可差出積其上ニ毎之改而普請入用積書
ゝ調ニ濱之方ハ先植木取掛
土取ニ為取掛置改震追ゝ時日相移改ニ付右
両人より図面差上改上積方為致改積差出先
両所共入人呂見届ゝ積ニ而為取掛改様可仕
旨ニ奉存改此段和伺申改

亥五月

道中奉行衆

海岸防御掛

今般品川附砲臺場防禦模様普請ニ付土
取人足往還横切注来ニ付差障不相成様見
計通行いたし并向此段及御達候

町奉行

勘定吟味役

目付

亥五月

濱御庭ニ砲臺屯所等取建候普請差急候儀
ニ付申上候書付

海岸防御掛

大目付

町奉行

勘定奉行

窪田源太夫

目付

林伊太郎

勘定吟味役

濱御庭ニ砲臺屯所等取建候普請差急候儀

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

二付海岸石垣ニ桟橋取付諸品持込等職人人
足共多人数入込混雑も仕取締向此節別而懸
念仕候ニ付外ニ普請場所類例を以勤番同心
可申上ニ雲ニ場所柄ニ付ニ殿奉行支配
向之内ニ普請場所勤番被仰付置ニ為見廻
夜中ニ小屋場ニ為泊ニ被仰
及熟合ニ雲差支無之旨申聞ニ右ニ通被仰
付候儀ニ候ハヽ私共より相達ニ候ニ仕奉存
候依之申上候以上

五月

連名

海舟書屋

覽

書面之通可被取計候事

海岸ニ備ニ儀ニ付申上候書付

ニ警衛掛

大目付

町奉行

窪田源太夫

目付

林伊太郎

勘定吟味役

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

海岸防備之儀ニ付望月大象見込申上候書取
被成御下候処御支配向ニ而ハ其筋一癖見込之為
致猶又軍艦組小野友五郎望月大象ニ談判仕
為取調候処別紙之通申立いつれも緊要之場
所ニ而尤ニも相聞候別紙繪圖面ニ而差上
申候尤差向候儀ニ付下ヶ札ニ而申上候場所
者仕越為取掛申候別紙之趣を以軍制掛ニも
一應御下ヶ被置候方ニ奉存候依之此段申上
候以上

亥五月

松平對馬守

酒井但馬守
井上信濃守
阿部越前守
竹内下野守
都筑駿河守
窪田源太夫
大井美濃守
池田修理
杉浦正一郎
堀　宮内

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

海岸防備之儀ニ付申上候書付

土屋民部
林伊太郎
鈴木大之進
黒坂丹助

海岸防備之儀ニ付御下談ニ付則場所見分之上見込之
趣相談仕左ニ申上候

一品川沖壹番并三番御臺場ニ而ハ御臺場ニ而取
建候相成四番七番御臺場ニ而ハ御臺場ニ而取建不相成候
間いつれより御應援ニ相成候哉之儀ニ付
壹番御臺場ハ品川地方獵師町ニ御臺場ニ御据
付有之候水戸殿獻上ニ御筒ニ引替右ニ代り
ニ長カノン廿四ポンド以上ニ而其指渡程是非共
御据付相成其上胸壁ニ是迄ニ有形ニ而ハ不
都合ニ付品川沖御臺場ニ振合ニ御直し相成

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

海舟書屋

五稜仕候三番台墨場を同所東之方上澤を閉
断之為一其上韮山形四艘ニ而後面より應援
之為一片稜仕候方可然存候
申奉存候

一品川海岸より引續大井村松平土佐守墓場迄
之人家引續地勢最防戦肝要ニ被存候ニ備
無之候ニ付不得止猟師町之墓場より縁を
取囲所より八町目之間ニ軽砲ニ大砲拾挺ニ
内貳挺之長カノン据付申度夫ニ得共海岸地面
掻ならし計ニ而之儀ニ付翼面ニ砲射雑形行防禦ニ

不相成候間無援凡三四百坪程ニ築立仕度尤
差向候ニ而ハ石垣ニ而之儀ニ候ニ付不及堰板等ニ
而手軽ニ囲之儀ニ而真ニ其中ニ沼砂を取入
候ニ付即時ニ築出来之申其上ニ胸壁を取
設周囲ニ浪除ケ之杭を立攻兵障碍ニ用ニ相
備度左候ハヽ随手軽ニて防禦ニ而完備ニ而基
礎ニも可相成儀ニ付此分三ケ所程取設相
成候ハヽ品川猟師町ニ墓場より土佐守墓場
迄ハ連接ニて翼面ニ砲火十字形ニ相成候ニ付
可也防禦出来之申候

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

一浦賀山下新規波戸場ハ松平大和守陣屋下ニ
而同家ニ而野戦砲所持罷在候ニ付此家ハ砲
臺のミ取建相成同家ニ而警衛被仰付候
然ル処
一高輪迄之間ハ防禦ニ備更ニ無之右ニ付同所
海岸ニ胸壁取設大砲ハ据付相成候ハヽ勿然
被此程中止尚又得と今夜見分仕候処同所ゟ
地面高く海面ニ臨ミ候ニ付発砲適度ニ無之
殊ニ翌面ゟ砲射難被行候ニ付是又急速品川
海岸ゟ振合ニ都合三ヶ所程築出しハ多人数
ハヽ浦賀山下新規波戸場ゟ芝田町松平修
理大夫臺場迄連接いたし候ハヽ大砲百挺
ハ三ヶ所ハ据付ゟ大砲百挺築出都而
品川海岸ゟ振合ニ仕候積ニハ庭有
一芝田町松平修理大夫屋敷臺場ハ急速据付置
候大砲ニ而ハ勿然ニ付得ゟ此度新規ハ取建ハ
相成ハ臺場ニ相對候ニ付霧ハ懸援ゟ為ニ修理大
夫臺場ゟ位置を聊変革仕候後ニハ庭有
一右同所續丹羽左京大夫臺場ニハ修理大夫臺
場ゟ五ニ應援出来候様砲門を切開重大ゟ大

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

砲ニ右不及或ハ十二汀位ニカノン三挺前面
ニ五挺并東ノ方町家ニ向ヒ松平相模守墓場
ヘ十字火ヲなさせたため此處ハ前同様カノ
ン貳挺程据付ハ可然候

一右同所松平相模守屋敷ハ相對候處ヲ胸壁ヲ
直シ同家ノ墓場ヲ十字火ヲ為シ候様十二汀
カノン三挺据付候ハヽ可然其他ハ對射墓ニ
据付ハ第一右大砲ハ同家所持ニ而引足
可申候

一右同所續松平越前守屋敷ハ相模守墓場
ヲ十字火ヲ為ス場所ニ据付候ハヽ可然右据
付候大砲ヲ同家所持ニ而引足可申候

一右同所續紀伊殿屋敷墓場ハ十二汀以上ノカ
ノン貳挺程越前守墓場ヲ十字火ヲ為サセ候
他ヲ對射ニ而濱御庭御墓場ヲ十字火ヲ為ス
ハヽ二十四汀以上ノ四挺程ヲ廿拇位
之短筒取交四五挺ニ据付相成候ハヽ可然哉

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

得共地筒井ニ在リ、十二斤六挺据付相成
テ自然ト
一濱地庭南ノ方隅角ヨリ中澪ヲ真向ニ請景肝要
ノ地勢ニ地形并行ハレ諸廻船ノ出船ヲ乗
来ノ節ニ付敵船ニ同様乗成ヘキ儀ニテ別
而厳重ニ備ヲ之ヲ而ヲ不知成場所ニ
付同所ニ新規胸壁築建廿四斤長カノン五
挺据付イツレモ迎射ヲ専一ヨリ為ニテ
ニ付紀伊殿屋敷并江川太郎左衛門屋敷ヨリ
ノ射線ニ而三重ニ射ヲ為ニテ相成ヲ他ニ

海舟書屋

東ノ方ニ折曲リテ長サ廿間ホーウイツスル弐三
挺ニ地据付相成テヲ可然
一同所続松平安藝守濱地庭同様是又中澪ヲ真
向ニ受肝要ノ地勢ニテ間迎射墓ヲ築造致シ
テ置ク屋竟ニ可有ノ其上濱地庭ノ前面ヲ防
射仕テ様相成尤可然場所ニ付此儀ニ廿四斤
長カノン五挺据付前面ニ右濱地庭同様ホー
ウイツスル弐三挺据付テ而可然テ
一右場所ヨリ引下リ築地寒橋東ノ方ノ前同様
中澪ヲ真向ニ受テ儀ニ而地勢至而宜テニ付

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

此處町家取拂胸壁を築造し為し迎賓臺より廿
四丈長カノン五挺東之方に折曲候處ホーウイツスル貳三挺据付相成候て
一佃島海岸築地之方へ向ひ候隅角に廿四丈以
上之處の貳挺程据付候て漸次充用所を至而狹隘之
場所に付海手へ少し張出し臺場形ち出来候
方可然候
一右同所東之方に深く上總澪を乘来るへき敵
船を越中島町打場に而ハ真向に迎候に付同
所に有合長カノン十二丈以上之もの五挺程

海舟書屋

廿挺ホーウイツスル貳三挺据付相成候て然候
一此處山異人屋敷より池上之方へ向ひ陸臺
場取建候處候て据付候節ハ品川沖
一圓に眺望いたさせ非常之節ハ臺場と為ケ
引差圖以角候に至極之地勢に候間差支
も無之處候へハ急速之陸臺場築建候迄
候据付候第一此邊之為論品川宿裏手に異人
共武器を運送いたし候て名所
臺場之守衛都而利を失ひ候申尤陸軍之備
肝要に候處候右之臺場圖所最前申上候節よ

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

り小相場ニ付ニ萬ニ見分仕候處何ニも防禦
ニおゐて不可欠處ニ肝要ニ地形ニ候ニ付別
して濱御殿藝州屋敷并築地寒サ橋ニ三ケ所
ニ澪筋ニ真向ニ受前面ニ放射ニ而ニ迎射
ニ而敵船尤困難ニ致候間是非ニも御建
築相成候様仕度且又品川宿ニ大井村ニ州
屋敷ニ藩場迄新規三ケ所程ニ軽弁ニ御建築ニ相
成候藩場も肝要ニ而願ニ大森町打場迄ニ
外ニも直ニ十字火ニ御備ニ相成候様仕
度候得共格別箇所多ニ付

海舟書屋

ニ申次第ニ至り申聞數ニ候間其段ニ不申上候
右新規ニ御高輪迄ニ而都合六七ケ所程ニ相
成此分并築地寒サ橋佃島等之築造ニ至迄早
々取懸り御座候様仕度尤御備筒ニ候ニ付
有合并諸家ニ御引上相成候ニ付急速ニ御
調ニ合ニ而申ニ奉存候且海岸通り諸家藩場ニ
ニも夫ニ御達ニ相成候様仕度奉存候

書面申上候通御備向ニ出来相成候ニ品
川四番七番御藩場ニ取建ニ其儘ニ捨置
相成候而ニ防禦ニ自然ニ差支候ニ付譯ニ御座

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

候此度取調申上奉急場所警衛之儀ニ付座
候四番七番台墓場ハ墓場所建築相成候ハゝいつ
迚ニ而も御援ニ而墓場と相成防禦自然を得
可申候ニ付座候
一壹番台墓場ハ四番所墓場所建築ニて援助
無之而ハ防禦難相立ニ付論ニ及ハ
急場之所備ニ而間ニ合不申候共一日ニ而猶
豫を一日ニ而も後ニ而成共申付而ハ
所詮ニ合ニ有無ニ不拘急速ニ築立相成候
候又ハ壹番ニ而四番ニ而ハ距離も少候間此

海舟書屋

所之深サを埋候ニ而浮者可然候ニ當三月中
旬頃之由英國軍艦ゴムボート右壹番ニ而四
番之間を通り壹番所臺場近所悉浅深測量
之上横濱へ乗戻候由ニ而是皆彼等之底意
難計候ニ付油断不相成候ニ付此ゴムボ
ートニ而唱候船者勿論蒸氣船ニ而大砲ハ最
重大なるものを移乗せ候ニ而多く者百貳拾門
壹挺三拾斤四挺積乗せ候ニ而此重大之大砲ハ
拾壹町を適度ニ而多し貳拾町位迄砲射
以後ニ候ニ付此船數艘所臺場之内

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

品川陸路ヨリ向ヒ自在ニ發砲以為
防禦可相立哉伝之四
番七番ニ臺場ヲ捨置有之候而者防禦相
立不申候警品川ニ臺場者私共見込之通ニ
補理相成候而已ニ而ハ勝算ヲ申ニ場合
ニ至リ不申元来防禦筋一概ニ申上ニ坐候
得共此内海岸防禦ニおゐて緊要之地ヲ仕
候者富津走水之ニ切所ニ候坐候此所ニ臺
場数ヶ所ニ建築有之候ハヽ品川ニ臺場者
二重之ニ備ニ相成候ニ付防禦之ニ基本相
立可申候上大小軍艦ニ有之ニ臺場ヲ應援
以為一ニ候者勿論敵艦ヲ追駆之申右ニ軍艦
ニ而ニ國地遠境迄防禦ニ備被為在候程ニ
候ハヽ勝算ヲ申ニ場合ニ相成ヲ申奉存
候

古ニ品川ヨリ築地ニ至迄海岸通リ大砲
ニ據付之相成間所取調ニ候書面之通ニ座候
尤急速ニ新規ニ取建之相成ニ臺場ヲ位
置并十字火等ヲ模様別紙繪図面ニ相認此段
申上候以上

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

亥五月

小野友五郎

望月大象

銃砲洲海岸明石町御用地之儀ニ付奉願候書付

書面伺之通可心得旨
申渡承知仕候

亥五月十六日

御警衛取調掛

海岸御警衛筋ニ付銃砲洲海岸明石町浪除場際壱ヶ所今般御用地ニ被 仰付候ニ付取調之處長弐拾九間餘中拾五間惣坪四百四拾三坪之地所ニ有之候買上相成候而者御入用モ拘り候間相應之代地可被下置處急場ニ御用筋ニ付先ツ御用地相成候間早々家作土蔵共取拂候樣御申渡替地并高札場所替其外之儀者追而取調申上候樣仕度依之繪圖面相添此段奉伺候以上

亥五月

名前連名

覺

伺之通可被心得候事

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

書面之通相濟候ニ付今日地主共呼出申渡候
付并此書取寫候迄申候

亥五月十八日

申渡案

信濃守
越前守
明石町
家持
庄吉
外貳人

海舟書屋

其方共所持町屋敷此度海岸御警衛筋ニ付
被下候間家持地借共一同早々家作土蔵并河
岸地建物ニ至迄取崩地所引拂可申候
右之通申渡候間其旨可存

亥五月

古町役人

松平安藝守
丹羽左京大夫家来より

屋敷有形家作其儘差上候儀ニ付評議仕
申上候書付

海岸御警衛掛

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

大目付
町奉行
勘定奉行
窪田源太夫
目付
林伊太郎
勘定吟味役

松平安藝守丹羽左京大夫家来共より申上候
書面被成御下一覧勘弁仕候處安藝守儀領海
内御築地下屋敷最寄海岸防禦共相心得左

京大夫儀去冨津御備場御警衛向并本芝壱町
目屋敷海岸防禦相心得候人数出し候儀被
帝都御守衛向人数出し候儀江戸表屋敷海岸防禦相心得候人数出し候儀何
分行届兼候間屋敷家作共差上度旨申出
府内御手薄之心相成候に付難被及御沙汰候
：有之候へ共猶又申上候趣：而者強而御
固被　仰付候ハヽ詰り実備之御警衛も不相
立御要害之心相成間敷候間外國掛大目付御
目付評議申上候通御聞届相成候方哉と奉存

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

其右升降共右場所より伐出之海岸砲臺出築立被仰出候内ニ而此程佐軍艦組小野友五郎望月大象見込申上候書面之内ニ而右箇所ニ豫め防射ニ仕法申上置候儀ニ有之此度海岸附諸家ゟ右材木伐追々申上候向も有之就ニ付内海非常警衛向ニ儀ニ付申上候通り相心得可安藝守方京大夫家来ニ而も伺之通り相心得存候此段私共評議仕申上候以上

海舟書屋

亥五月

松平對馬守
酒井但馬守
井上信濃守
阿部越前守
竹内下野守
一色山城守
都筑駿河守
窪田源大夫
大井美濃守
杉浦正一郎

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

松平安藝守家來内意
堀宮内
土屋民部
林伊太郎
鈴木大之進
黒坂丹助
河内守
攘夷決定ニ付而者藩屏ニ任相盡度儀者勿
論之儀ニ而海岸有之場所ハ海防之築急務之
儀安藝守領分ハ東西數十里ニ海岸殊ニ西國
より攝海ニ至ル船路要所ニ有之防禦手配專ら
心配仕度處無而武州大森海岸防禦此元藥地
下屋敷最寄海岸要所防禦精撰ニ人數差出方
被仰出候ニ付而者帝都近守厳重ニ警衛仕度處
何分ニも人數手配り國中ニ難能當惑仕候依
之去秋内変革被仰出候ニ付而者此元ニ差置候家來とも追々國元ニ差越候儀
ニ付格外人數等減少仕候就而者藥地下屋敷
之儀前件ニ通防禦相勤居候場所ニ付実以
人數配當難行屆依而者御本意ニ

奉存候得共右下屋敷之儀ハ在来長屋并土蔵
樹木共如儘差上申度奉存候右之趣名模を以
伺候内慮ニ候間安藝守申付越候此段申上候以
上

松平安藝守内
梶川銀次郎

五月十二日

松平安藝守家来より

築地下屋敷有来長屋土蔵等其儘差上候
儀ニ付評議申上候書付

外国掛

海舟書屋

大目付
目付

松平安藝守家来より領海ハ勿論此度
帝都内守衛向被
仰出も有之上者江戸表築
地下屋敷最寄防禦之儀ハ何分行届不申候間
下屋敷在来長屋并土蔵樹木共其儘差上候
様仕度との儀相伺候書面被成御下一覧勘
弁仕候處追々被
仰出之趣も有之候ニ付申
立之趣不相當之筋も無之候間御聞届相成可
然哉ニ奉存候尤同所之儀者海岸ニ枕候場所

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

柄ニ付砲臺取立方等之儀若海岸ニ警衛掛見
込ニ有之候趣ニ候間右取建方等之儀若右掛
ニ被仰渡可然奉存候依左候得者書面伺之通相
心得可申旨安藝守家来ニ被仰達其段ニ作事
奉行ヘ被仰渡砲臺取建方等之儀若海岸ニ警
衛掛ニ被仰渡可然奉存候依之私共同役一統
評議仕此段申上候以上

亥五月

松平對馬守
酒井但馬守
大井美濃守

大久保權右衛門
杉浦正一郎
新庄右近
高力直三郎
成瀬彌五郎
向山榮五郎

丹羽左京大夫家來内意　河内守

左京大夫芝新網町屋敷ヲ用ニ付家作ニ手ヲ
取揚為代地本芝壹町目松平越前守様ヨリ陣屋
地家作共去酉年被下ニ相成候處右新網町屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

數ヶ儀舊來當所來差置候場所ニ候庭并向右
代地ニ引移被下相成候本芝壹町目屋敷ヲ早
速藏所取建可申筈ニ候庭候處連年勝手向手
詰之處打續不時之物入差湊候ニ付分行屆兼罷在
候處海岸御警衛御指揮被為在候ニ付ハ有ヶ
可也ニ付御警衛相成候ニ付之格手當可申付儀ニ
候ニ付勝手向不一通及逼迫眼
前差支候藏所取建候儀ハ御成兼候ニ付
庭候處兼而蒙 仰有之且又此度不時ヶ出
張引續京都御警衛を

淘舟書屋

仰付候處右用途之儀ハ心配罷在候ニ付
合ニ而右本芝屋敷御警衛手當可申付手段無
之當惑仕候ニ付去迚此度海岸ヶ屋敷夫ニ差置候
儀如何敷候ニ付間ヲ相成候ニ此節右屋敷家作
共差上候樣仕度奉存候ニ付甚以自由ヶ間敷恐入
候儀ニ候ニ付滯在此段各樣迄御内慮奉申上
候以上

五月十六日

丹羽左京大夫留守居

小澤長右衛門

書面之趣一覽勘弁仕候處海岸屋敷警衛手

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

段無之ニ付家作共差上候様仕度ニ儀ハ
此程申下ケ相成候松平安藝守築地屋敷同
様之儀ニ而向後海岸下屋敷有之向ニ追々
右同様之儀申出候儀も可有之非常ニ節公
邊人數而已ニ而ハ手足無之場合有之
哉も難計候ニ付此節警衛手
段無之云々申出候ニ付ての儀ニ強而被仰付
ニも詰り實備ニ而ハ要害ニ而相成申間敷
間安藝守同様為差上候方可然尤右屋敷警
備ニ候ハ安藝守書面ニ私共申上置候得者

海舟書屋

古同様ニ而ハ置被為在候方ニ奉存候尤右
書面ニ趣ニ付伺之通相心得可申旨左京大
夫ニ被仰達其段ニ而作事奉行ニ被仰渡候
方ニ奉存候私共同役一統評議仕此段申上
候

六月五日

松平對馬守
酒井但馬守
大井美濃守
大久保權右衛門
杉浦正一郎

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11

陸軍歴史巻十一

土屋民部

新庄右近

高力直三郎

成瀬彌五郎

向山榮五郎

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-11

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-11